

清末小説から 108

2013.1.1

商務印書館の名称と日中合併問題 2 樽本照雄 1

《宵人一夕》の原作 渡辺浩司 8

思綺齋の身份 魏愛蓮著 趙穎之翻译 19

杨味西及其《时新小说》略释 傅兰雅“时新小说”征文参赛作者考(四) 姚 达兑 21

清末小説から 7 18 28

本年もよろしくおねがいいたします。『清末小説』第35終刊号を刊行しました。目次は本号30頁をご覧ください。基本的に本研究会ウェブサイトで公開しています。そちらもどうぞ。☑

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

商務印書館の名称と日中合併問題 2

樽 本 照 雄

以下にいくつかの書籍から奥付ほかの関連部分を抜き出した。出来事も 印をつけて注記する。

印刷所の住所は、のちに改められて前出の上海北福建路第二号となった。表示が変更されただけで同じ場所である。

表示を見てもらえればわかる。『明治

法制史』の奥付だけがほかと異なっている。印刷所の住所であるはずのところに、発行者商務印書館の名前がある。中村の指摘するとおりだ。

これらの奥付をならべて見て、私はひとつのことに気づいた。表示項目の順番なのだ。

奥付の表示項目と順序は決まっている。刊年、作品名、原著者、訳者、校者、発行者、印刷所(者)および総発行所である。書籍の内容によっては訳者がなかったり校者があげられなかったりはする。しかし、発行者が先行して次が印刷所、最後が総発行所の順であることにはかわりがない。

しかし、例外がひとつある。中村説が根拠とする『明治法制史』だけが、印刷者を前におき、そのあとに住所付の発行者がくる。印刷者と発行者が入れ違って

【表】印刷所と総発行所

年 月	印刷所	総発行所	書 名
1902光緒二十八年二月	北京路四十一号	上海商務印書館	『商務書館華英字典』
1902光緒二十八年七月十九日	北京路四十一号(美華書館西首)で失火 - - - - -		
1902光緒二十八年八月十五日	不 記	上海商務印書館	『外交報』第21期
1902光緒二十八年九月十五日以前	印刷所を上海鉄馬路橋北銭業会館西文昌閣隔壁に新築 - - - - -		
1902光緒二十八年十一月	上海鉄馬路橋北銭業 会館西文昌閣隔壁	商務印書館	『日本政治地理』
1903光緒二十九年三月	漢口分館の設立 - - - - -		
1903光緒二十九年五月初一日	美界北穿虹浜路	上海商務印書館	『繡像小説』第1-12期広告
1903光緒二十九年五月	上海鉄馬路橋北銭業 会館西文昌閣隔壁	上海商務印書館	『普魯士地方自治行政説』
1903光緒二十九年六月	不 記	上海商務印書館	『明治法制史』 (上海鉄馬路橋北銭業会館西文昌閣隔壁 発行者 商務印書館)
1903光緒二十九年十月初一日	日本金港堂と合併 - - - - -		
1904光緒三十年二月二十五日	不 記	商務印書館	『東方雜誌』第2期広告
1904光緒三十年七月	上海鉄馬路橋北銭業 会館西文昌閣隔壁	中国商務印書館	『英国詩人吟辺燕語』 説部叢書第一集第八編
1904光緒三十年十月	上海北福建路第二号	商務印書館	『和文漢訳読本』扉に商務 書館
(推定:1905光緒三十一年二月)	不 記	中国商務書館	『繡像小説』第31期柱)
(推定:1905光緒三十一年三月)	不 記	中国商務印書館	『繡像小説』第32-72期柱)
1905光緒三十一年三月二十五日	不 記	中国商務印書館	『東方雜誌』第2年第3期広告
1905光緒三十一年四月	上海北福建路第二号	中国商務印書館	『珊瑚美人』説部叢書第二 集第五編
1906光緒三十二年二月	上海北福建路第二号	中国商務印書館	『寒桃記』説部叢書第四集 第一編 印刷所の写真
1906光緒三十二年四月	上海北福建路第二号	商務印書館	『澳洲歴険記』説部叢書第 四集第六編
1906光緒三十二年孟夏	上海北福建路第二号	中国商務印書館	『煉才爐』説部叢書第五集 第八編
1906光緒三十二年季夏	上海北福建路第二号	中国商務印書館	『美人煙草』説部叢書第六 集第三編

いるのだ。

ほかの書籍は、すべてが住所付の印刷所である。ということは、『明治法制史』だけが奥付に誤植があるのではないか。住所付の発行者をもって中村説の根拠にするのは不十分だということだ。

「未だ正式調印を見てゐないとは言へ、合辦を前提とする投資が既に行はれ、出版活動さへ營まれてゐたことは明らかである」(第12号100頁)とまで書かれている。説明文の前半部分は、正しいと私は考える。なぜなら、問題にしているレンガ造りの巨大印刷所の完成時期を考えても金港堂の事前投資、あるいは援助がなければ新築はありえない。商務印書館の失火とは無関係に以前から建設が進められていた、と考えざるをえない。私は従来からそれを主張している。

このいわゆる事前投資について、中村はその時期を以下のように述べている。

金港堂の投資が行はれたのは、光緒二十八年(1902)七月の<舞馬の災>に商務印書館の經營が破綻に瀕してから以後、上記《日本政治地理》が上梓された同年十一月以前 例の<教科書疑獄>などの、一部で密やかに囁かれはしてゐたものの、摘發されるに至るまでには三・四個月もある時であつた。第12号100頁

私の見方は、異なる。失火のずっと前、たぶん1901年頃にさかのぼる。その理由は、新築になる巨大印刷所の完成が火災後のわずか二ヵ月ほどであつたからだ。

商務印書館と金港堂ともに合併を前提に事業を進めていた。ところが1902年、両社に偶然のようにそれぞれ異なる災難が襲った。商務印書館には失火が、金港堂には教科書事件である。そのため正式合併の締結は1903年に延期せざるをえなかつた。そういう経緯である。

中村説後半の部分はどうか。金港堂が商務印書館の名称を使用して独自の出版活動を行なっていたと踏み込んで記述する。しかも、正式合併以前にはすでにその動きをしていたというのだ。金港堂の上海支店であつたという発想は興味深い。それを証明できる資料があれば私も読みたい。

「中国商務書館」という「印」抜き表示のある『繡像小説』がよい例となるだろう。該誌は商務印書館が金港堂と合併する前に創刊された。中村も、それを視野にいれて正式合併以前に金港堂が独自の出版活動を行なっていたという。

《繡像小説》の場合も、亦同様であつたらう。総發行所として商務印書館の名を借りてはゐるが、新書廣告の欄で<上海商務印書館>の名を隠見させてゐる。實は、原亮三郎が李伯元に委託して編輯させた雑誌で、金港堂上海支店發行としてもをかしくはない體のものであつた。第12号107頁

中村は、広告に見えるこの上海商務印書館は金港堂上海支店だ、ともいう。はたして、そうか。

『繡像小説』の奥付に金港堂を示唆する文字を組み込んでいるかどうか。それを見る方がよい。

原亮三郎が『繡像小説』の運営に深く関与しているのであれば、柱に「印」抜き「中国商務書館」を部分的に使用する必要はないだろう。奥付、あるいは裏表紙に堂々と自らの存在を誇示できる表示を出すのではないか。それがあってこそ金港堂による独自の出版活動であるといえることができる。しかし、全72期をつうじて奥付には「総発行所 / 上海棋盤街中市商務印書館」とあるだけだ。

例外の『明治法制史』を見てこの商務印書館が金港堂の匿名であるとするのは無理である。

『最新国文教科書』の刊行

原亮三郎あるいは金港堂が関与したというならば、『繡像小説』よりも『最新国文教科書』のほうがより適切な例となる。

教科書の編集刊行において、商務印書館を一躍著名にしたのが『最新国文教科書』であった。長尾雨山が家族とともに上海へ移住したのは、商務印書館と金港堂が合併した直後だ。商務印書館では、それまで独自に進めていた教科書編集作業を中止した。それにかわり長尾らが、商務印書館編訳所の人々と取り組んだのが『最新国文教科書』の編集である。教科書編集において実績と経験をもつ日本人の協力があつたから短期間のうちに完成を見た。しかも、その出来映えがよかった。当時の人々に広く受け入れられる

結果となる。

その表紙には、日本人と中国人の名前が掲げられている。第1冊と第10冊に見える人名を示す(肩書きは省略。渡辺浩司氏より複写をいただいた。感謝します)。

第1冊 小谷重、長尾楨太郎、高鳳謙、張元濟校訂。莊俞、蔣維喬、楊瑜統編纂

光緒三十年歲次甲辰二月二十三日
初版 / 光緒三十一年歲次乙巳四月十五日十版

第10冊 小谷重、長尾楨太郎、蔡元培、高鳳謙、張元濟校訂。蔣維喬編纂

光緒三十一年十月初版

まさに日中共同編集による教科書であることが明らかだ。商務印書館と金港堂が合併会社となった事実がこの刊行物の背景に存在する。

では、この教科書のどこかに金港堂を匂わせる部分があるだろうか。もし、原亮三郎に自己の存在を示したいという願望があるのであれば、この刊行物にこそそれを込めるだろう。印刷所の住所に発行者の商務印書館を置くような小細工は必要ない。

だが、それらしい記述は、どこにも見つけることはできない。

表紙に上海を割注して「上海 / 商務印書館印行」とある。

中村説がすこし理解しにくいのは、この上海商務印書館も金港堂の分身であるかのように考えているところだ。

あるらしい。

上海商務印書館 = 金港堂説

中村論文(第12号97頁)から引用しながら、私の説明をつける。

換言すれば、総發行所として掲げる<商務印書館>の名が、突如として<上海商務印書館>に改められるのは、管見の限りでは、上記《普魯士地方自治行政説》の奥付からのごとで、以後合辦の正式調印時まで続く。

上の表に示したように、上海商務印書館が出てくるのは『繡像小説』も早いものになる。その時期はといえば、漢口に分館を設立したあとだ。漢口分館の設立は光緒二十九(1903)年三月だった(王雲五『商務印書館与新教育年譜』11頁)。ここから見れば、普通は漢口に対比した上海という意味だ。中村も、そう考えないわけではない。

<商務印書館大事紀要>(張靜廬輯註《中國出版史料補編》所收)には、光緒二十九年(1903)の條に<成立第一分館 漢口分館>とあり、同年五月初一日創刊された《繡像小説》第一期の裏表紙奥付によつてもその開設が確認され、しかもその時期が《普魯士地方自治行政説》の刊記ともほぼ一致するから、或いは<分館>に對する<本館>の意味で、<上海>の文字を冠したものかとも考へられる。しかし、それは聊か考へ過ぎで

同年五月初一日に創刊した『繡像小説』奥付には次の表示がある。「総發行所 / 上海棋盤街中市商務印書館」「寄售処 /漢口商務印書館.....」。分館、すなわち支店であることが明白な表示だ。『繡像小説』創刊号から、それに対比するかたちで広告にも上海商務印書館と示している。どう考えてもこちらは上海の商務印書館という意味だ。それを中村は「しかし、それは聊か考へ過ぎであるらしい」と退ける。考えすぎではなく、普通の捉え方だと思うのだが。退けるその理由というのは、こうだ。

現に、光緒二十九年六月首版の《明治法制史》(清浦奎吾原著・商務印書館譯)はじめ、同年九月首版の《納爾遜傳》(中村佐美譯・何震彝編訂)などの奥付にも<漢口分館>の記載はない。歴史的に意義深い分館の設置であっても、當事者はその重要性を、さ程明確には意識してゐないのである。されば、この場合さう解釋するのは適當ではない。のみならず、合辦以後に於てすら、<商務印書館>・<上海商務印書館>が使ひ別けられてゐる趣きが、見え隠れしてもゐる。

奥付に漢口分館の記載はなくても、分館が存在している事実はある。記載のあるなしが問題ではないのだ。上海をつけるのは、国内の別都市と區別するためだと考えるのが一般的だろう。漢口分館に

対して上海の商務印書館と捉えるのがよ
ろしい。

中国商務印書館 = 金港堂説

上海商務印書館という表示は、上海の
商務印書館である。では、中国商務印書
館はどうか。「中国」をつけるのは、こ
れは当然日本を意識している。

前出の表に明らかなように、金港堂と
合併した後に中国商務印書館が出現する。
中村は、こちらの中国商務印書館表記に
ついては金港堂の主導で行なわれたもの
だという(第12号103-104頁。図版、傍点省
略。誤植は正した)。

《東方雑誌》第二期(光緒三十年二月二
十五日刊)以下に、The Russo-Japanese
War.(fully illustrated)なる畫報の廣告
が、屢々掲載されてゐる。発行所は、
<日本東京市、金港堂書籍株式會社>、
総代理寄售所として、<上海棋盤街
中市、商務印書館>とある。それが
第二年第三期(光緒三十一年三月二十
五日刊)掲載の第八號の廣告からは、
発行所<大日本東京市、金港堂書籍
株式會社>、総代理寄售所<清國上
海棋盤街中市、中國商務印書館>と
改められる(圖版4)。雑誌の背文字
も、同時に<中國商務印書館印行>
と改められる(圖版5)。<日本>の頭
に<大>の一字を加へ、<大日本>
として<清國>に對比せしめ、これ
までは<上海商務印書館>と、相手
を牽制するに止めてゐた態度を一擲
して、<中國商務印書館>と誰の目

にも異様に映る呼稱を用ひ始めたと
ころに、問題點の所在や金港堂側の
氣概が窺はれよう。その權幕に怖れ
をなしたか、創刊號に見えて以來久
しく掲げられなかつた<日本の金港
堂の在清國總代理店>といふ商務印
書館の挨拶廣告が、二巻三期・五
期・六期と續けて出る。殊に滑稽な
のは第五期の場合で、表頁が<中國
商務印書館>を唱へる上記 The
Russo-Japanese War.の廣告、裏が右
の代理店の廣告といつた工合で、嫌
がらせとも覺しき空氣さへ感ずるの
である。

同じ書籍について広告の表示が変化し
ているという指摘だ。

発行所である金港堂書籍株式会社(名
称はそのまま)の住所が、日本東京市から
大日本東京市へ変化した。

一方の総代理寄售所である商務印書館
は名称も中国商務印書館に変わったばかり
か、住所は上海棋盤街中市から清國上
海棋盤街中市へ書き換えられている。

同時に掲載された図版を見ても、『東
方雑誌』背表紙は、第2年第3期から第
7期までは中国商務印書館だが、第8期
からは「上海 商務印書館」だ。

以上の表示を見ると、中国商務印書館
と上海商務印書館が混在していることにな
る。

中村説によれば、金港堂による嫌がら
せだという。ここは理解しにくい。両者
のあいだには文化摩擦があり、金港堂の
存在を強調したいがために、わざわざ中

国商務印書館という名称を使用したといいたいらしいのだ。それにしても、見え隠れするだけで一貫したものとも思えない。だからこそ「嫌がらせ」なのか。しかし、そのような嫌がらせをして何か意味があるのだろうか。金港堂はそうしたかったのだ、という中村の把握なのだろう。

私にいわせれば、金港堂が嫌がらせをするのであれば、中国商務印書館とは命名しないだろう。可能性として清国商務印書館とでもつければ、金港堂の「思惑」も実現したかもしれない。だが、私の見るところ金港堂にそれらしい「思惑」があったとは考えられない。

商務印書館は、上海に創設された。上海に1社だからわざわざ上海とつける必要はない。しかし、漢口に分館を設けてからは事情が異なる。それとの区別をする必要が生じる。上海商務印書館と称するのは自然なことだった。その商務印書館が日本金港堂との合併会社となる。名称は商務印書館を継承したとはいえ、外部に向かって合併会社であることを宣伝するわけではない。どちらかといえば、日本との合併の事実を隠しておきたかったのが本音である。しかし、合併の事実を知る人がでてくれば、それに対する手当も必要になってくる。迫られて日本ではないことを強調するために自らの発案で中国商務印書館名を使用した。私はそう推測する。

商務印書館に日本の資本が入っていることを攻撃した中国図書会社の例があった。1908年のことだ。中国と名のること

自体に商務印書館と日本の関係を批判する意味を込めていた。

商務印書館は、当時の中国社会の雰囲気を感じて察していたにちがいない。今から見れば、1911年の辛亥革命を直前にひかえた時期だ。清朝という異民族支配から脱出しようとしていた。だからこそ異民族である日本の金港堂と合併したという事実を公表しなかった。合併後は、前もって中国商務印書館と名のことで防衛する意思を示していたと考える。しかし、これはかえって逆効果ではなかったか。日本を意識していることを、商務印書館みずからが暴露してしまったからだ。

私は、上海商務印書館であれ、中国商務印書館であれ、それらは商務印書館自身のつごうから生じた名称であったと考える。日本の金港堂との合併が少しは関係している。しかし、それが主要な理由ではない。ましてや、金港堂の分身、上海支店ということは実質的に存在しないのだ。まことに常識的な結論に落ち着くわけである。 罫

巖民、莫非編著

『泉魂：紀念巖薇青先生誕辰100周年』

済南出版社2012.3

關於《老殘遊記》的作者劉鶚... 巖薇青
劉鶚和太谷学派 巖薇青

《宵人一夕》の原作

渡辺浩司



"A step on the stair!" he whispered, in sudden alarm. "And I was sure the house was empty."

1

《小説月報》第九卷第九号(商務印書館,1918年9月25日 - 東豊書店1979年10月影印《小説月報 自創刊號起至廿二卷十二期止》を使用,発行年月日は『清末民初小説目録 第4版』(樽本照雄編,2011年3月31日)による)に、《宵人一夕》なる短篇作品が掲載された。書名下には“毅漢”とあるだけで、創作のように見える。『清末民初小説目録 第4版』も創作と見なしている(X0573)。しかし、この作品は実は翻訳なのである。その原作等が判明したので本稿で報告する。

原作名は『Boston Blackie's Little Pal』、原作者はJack Boyle、初出掲載誌は『The Red Book Magazine』Vol.31-No.2(1918年6月,未見)、後に『Blackie's Little Pal』というタイトルで『The Strand Magazine』Vol.56-No.334(George Newnes,1918年10月)に掲載された。その後、他の短篇と併せて『Boston Blackie』(The H. K. Fly Company,1919年)として出版された。

Jack Boyle は、本名 John Alexander

Boyle、アメリカの作家で、1881年生、1928年没。本作にも登場する泥棒 Boston Blackie を主人公とするシリーズで人気を博し、後に、映画化*1やラジオ及びテレビドラマ化もされている。

訳者“毅漢”は、張毅漢で、原籍は広東新会、1895年生、1950年没、13歳から小説を発表し始め、共作も含めて約130の作品を残した。その大部分は翻訳小説という。

2

Strand 誌掲載の『Blackie's Little Pal』に拠り、原作のあらすじを述べる。

夜、家人のいない Wilmerding 家の邸宅の居間で、白いハンカチでマスクをし、コートの下に銃を隠し持った男が念入り

に壁を調べていた。この男が Blackie、危険を冒して最高の防犯システムに挑む泥棒である。彼は有名なこの家の宝石を狙い、使用人から漏れ伝わった、壁に埋め込まれた金庫を、血が出る寸前までサンドペーパーで磨いた指先で探り当てた。壁板をスライドさせ金庫が現れると、彼は金庫の方に金属製の円盤を当て、自分の耳に音の増幅器を当て、ダイヤルを回した。

後方からかすかな音が聞こえると、彼はすぐに身体を伸ばし、機械を片付け壁板を戻した。音は階段からで、彼は「使用人が1階で寝ている以外に誰もいないはずなのに、こっそり2階から下りて来る。あと5分で終わっていたのに」等とつぶやきながら、非常口として準備していた窓の厚手のカーテンに隠れた。ドアに近づく足音が聞こえ、恐る恐る中をのぞく小さな子供の頭が見えた。4歳ほどの男の子で、やがて勇気を出して小さな声を上げ、室内へ駆け込んで、存在自体を知らないはずの Blackie の腕の中へそのまま倒れ込んだ。Blackie は恐怖の叫び声を上げたが、すぐになだめるように子供に話しかけた。子供は彼の目を不思議そうにじっと見、ほっとしたように彼の腕に身を寄せた。そして困惑顔の彼に向かい、笑顔で「誰？ サンタさんなの？ サンタさんじゃないね。だって顔の下はハンカチで、ひげじゃないもの。」等と話し、ハンカチを取ろうと手を伸ばした。彼は「サンタではない」等と答え、逆に子供に名前を尋ねた。子供は「Martin Wilmerding Junior で、4歳」と答えた。

彼が「両親はどこ」等と尋ねると、「パパは遠くへ行ったとママが言っていた、ママはパーティーに出かけた、目が覚めたら暗くて少し怖かった」等と答えた。彼は状況を理解し、1階に下りた理由を聞くと、子供は「1人では怖いので、Rex(犬のぬいぐるみ)を取りに来た」等と答え、窓の下の椅子の所に行き、クッションの下から Rex を連れ出し、彼の所に戻り、しっかりと腕に抱きついた。子供は「いつも Rex と一緒に寝るのだけど、今日は子守がそれを忘れた。目が覚めた時、思い出して1階に下りた。Rex がいれば怖くない」等と話した。彼は子供に同情し、「小さいのに Rex のためにここまで来るとは勇気がある」等とほめた。子供は彼を友達として「僕は君が好きだよ、いい人だからね」等と言った。彼にとっては、時間がたてば、それだけ危険が増すのだが、かといって、子供を1人にしておくこともできなかった。彼が2階の部屋に戻るよう勤めると、子供は一緒に来てベッドのシーツをかけてくれるよう頼んだ。彼は承知し、子供の先導で部屋まで行き、母親がするようにやさしくシーツをかけ、「おやすみ」等と言った。子供が彼の手を取って、「眠るまで手をつないでいて」と言ったので、彼はそのままベッドの縁に座り、Wilmerding家の若き後継者の手を握っていた。5分後、子供が寝入ったのを見て、彼は「気の毒な子だ」等と言いつつ、目的の部屋へ下りて行った。再び壁板を開き、金庫の番号を調べ始めた。半分ほど進んだ所で、表から車の警笛が聞こえた。人が来

たという Mary の合図だった。彼は指紋を拭き取り、壁板を戻し、窓際のカーテンに隠れた。「宝石を手に入れるまでここにいるぞ」等とつぶやき、「一体誰が来るのだろう。逃げ道は万全だ」等と考えていた。

車が止まる音が聞こえ、男女がやって来るのが見え、彼は「面白くなりそうだ」等とつぶやいた。2人が入室し、明かりがついた。礼装で着飾った美男美女だった。女の方が「どうしてそんなに苦しんでいるの？」等と言うと、男は女の手を取って「貴女への愛のため」等と答えた。男は女をやさしく引き寄せ「この苦しみは今夜で終わりにしたい」等と言った。女は動揺し、男から離れ「そのことは口に出さないと約束したじゃない」等と拒んだ。非難する声の一方で、目には愛情と後悔の気持ちが現れ、また、怖いものを避けるという女性の直感も含まれていた。男は「ここに来たのは貴女を愛していることを言うためと、明朝ホテルへ出発することを言うためだよ」等と言った。女は「いや」と叫び、彼のそばに寄り、引き留めるようにその腕をつかむと「この家での空虚な生活に私を置いていくのですか」等と言った。隠れている Blackie には、女の言葉と態度から、愛と夢とが徐々に失われ、囚人のようにこの豪邸で暮らす女のことが想像できた。男は「出発するのは事実だが、貴女を置いていくのは事実ではない、なぜなら貴女も一緒に行くのだから」等と言った。女のほほには赤みが差し、目が一瞬、輝いたが、その後、彼を押しやりうなだれ

て「それはできない」等と答えた。男は「残った連中の噂話など気にせず、未来のある美しいハワイへ一緒に出発しよう」等と説得した。更に「ハワイへは、農園の労働争議が深刻化したためにすぐに戻らねばならなくなった」と理由を話した。女が首を振り「私は行けない」等と答えると、男は「臆病なのか、それともまだ夫を愛しているのか」等と尋ねた。女は感情の動きを示した後、男の目を見て「今夜はもう夫のことを愛していない」等と答えた。男は一緒に来るよう促した。女は考えた；夫 Martin を愛し、幸せだった結婚当初や子供が誕生した時のこと；やがて夫が彼女の愛を当たり前のものと見なし、何の関心も示さなくなり、2人との溝が次第に広く深くなっていったこと；この数年は他人同様に暮らしていたこと等を思い出した。そして、目の前には、愛を告白した男性が家と夫を捨てるよう嘆願している。女は結婚指輪を見て、答えにのどを詰まらせた。かつて自分の前にかしずき、手にキスをし、指輪をはめた夫を思い出し、そのかつての夫と同様に献身的な愛情を示した目の前の男性 Don Lavalley を愛した理由が、彼女には初めて理解できた。女は立ち上がり「もし自分を本当に愛しているなら、行ってちょうだい」等と言った。男は失望と悲痛のこもった憤りを女に向け「これで終わりなんだね」等と尋ねた。女は「これ以上私を苦しめないで、行ってちょうだい」等と叫んだ。男がコートを着、「理由を話してくれるかい」と言うと、女は「子供とこれのため」と、結婚指輪

を示し言った。男は「僕を愛してくれていても、貴女はそれに忠実でいる。しかし、夫の方は? 貴女の夫とは面識は無いが、理由も無く、貴女のような妻をまるで無視する男などいない」等と言い、それ以上の口論を避け、彼女を引き寄せ、唇にキスをした。男は「僕たちの最初で、そして最後のキスだね、さようなら」等と言い、部屋を去った。女はドアの所まで追いかけて、男が玄関のドアを開けた時、耐え切れず、男の名を呼びながら、ふらふらと歩き、手を伸ばした。男がすぐにそばに来ると、女はその胸に寄りかかり、泣きながら「私を連れて行って、貴方の望むようにする」等と言った。2人は部屋に戻り、女は指輪をはずし暖炉の灰の中へ落とした。そして「決して私を1人にしないと約束して」等と言うと、男は「僕たちは決して離れることはない」等と答えた。女が「子供も一緒に」等と話すと、男は「もちろん」と答え、更に、早目に乗船するので、船上で必要なものだけを1時間で用意しようと言った。戸惑う女に、男は「船は Don Lavallo とその妻で予約してある」等と話した。女が「そこまで自信を持っていたなんて」等と失望を交えてつぶやくと、男は「自分の愛が貴女を口説き落とせないはずはないとわかっていた」等と答えた。念を押して、1時間以内に帰るので、用意しておくよう言うと、女は「夫がくれたものは何もいらぬが、母が集めた宝石があり、自分のかばんでは危険なので、船の金庫に入れるまで預かってほしい」等と言った。女は壁の金庫から宝石箱を6つ

取り出し、男に預け「荷物をまとめ、子供を起し、夫に手紙を書いていく」等と言った。男は、手紙は港に着くまで出さないよう言い、女から夫が Del Monte ホテルにいることを聞いた。男は宝石箱をコートに収めると「1時間で戻ってくる。貴女と再会するまでは、1分が1日にも感じるだろう」等と言い、退室した。女はしばらく椅子に沈み込み、すすり泣きを抑えるためにのどをつかんだ。その後、用意のため、2階へ上がった。

Donald Lavallo が車に乗ろうとした時、男が近寄り「私の妻の宝石のことで君に迷惑をかけ申し訳ない」等と声をかけた。Lavallo の顔から笑いが消え、「貴方の妻の宝石! 貴方は?」と言うと、男は「私は Martin Wilmerding だ。君たちの話はすっかり聞かせてもらった」等と答えた。男(Blackie)の手の銃が Lavallo の胸をついた。Blackie の要求で、Lavallo は宝石を手渡した。Blackie はまた「もし君が再び妻に接触しようとするれば、その頭を撃ち抜く」等と警告した。Lavallo は力なく「わかった」と言った。Blackie は更に「朝、もし君が乗船していなければ、君は生きて日没を見られないだろう。君は乗船しますか、それとも死にますか?」等と尋ねた。Lavallo が「乗船する」と答えたので、Blackie は「我々の間で必要な話は済んだ。今、君を殺さなかったのがなぜかは私にもわからない。行きなさい」等と言った。Lavallo は車のエンジンをかけ「一言だけ言いたいことがある。責められるのは君で、Marian を非難しないように」等と話した。Blackie は「今夜、君

の口から出た最もまともな言葉だ。彼女を責めない」等と答えた。Lavalley の車は霧の中へ走り去った。

Blackie は通りの中ほどの別の車に乗り込んだ。マフラーで顔を隠した運転手(Mary)はうれしそうに声を上げ「こんなに長くどこにいたの? 何があったの? 宝石は手に入れたの? 何か問題があったの?」*2 Blackie は「問題は無い。宝石はここさ。たくさんの方があったよ」と満足そうに答えた。続けて「Mary、家に帰ってから話すよ。さあ行こう。帰るまでにすべきことがいくつかある」等と言った。途中、彼は電報局に立ち寄り、Marian の名で Martin Wilmerding に「子供も私も貴方を必要としている。帰って来て」、そして、D.L.の名で Marian に「貴女が渡してくれた包みが私の本当に欲しいものだった。ありがとう、さようなら」、と電報を打った。彼は満足し、車に乗り「Mary、家に帰ろう。そんなにひどい仕事ではなかった」等と言った。それから「夫に妻を返し、子供に父を返し、心に恥じることなく、息子の顔を見る権利をその母に返した。Martin Wilmerding Jnr.のような真の勇気を持った若い友人と正面から付き合った。そして、給料に Wilmerding 家の宝石をいただいた。一体誰が悪者だと言うんだ!」等と、半ば独り言のように言った。

独りよがりの泥棒話である。このあと、Wilmerding 家もしばらくは穏やかであろう。しかし、近い将来、宝石を騙し取られたということで、夫妻の仲は再び悪化

し、離婚、そして人間不信になった Marian から子供は虐待されるであろう。当たり前であるが、泥棒は善行ではないのである。

3

中国語訳について述べる。まず問題となるのは、アメリカの Red Book 誌とイギリスの Strand 誌のどちらに基づいて翻訳されたのかである。Red Book 誌未見なので、本稿では代わりに同じアメリカで刊行された単行本を使用し*3、アメリカ版(以下、ア版と略称)とイギリス版(以下、イ版と略称)とで異なる個所と翻訳を見てみる。単語の書き換え(例: ア版 - gun、イ版 - revolver)は数か所見られるが、文・段落に及ぶものは2か所のみであった。まず、冒頭の Blackie の紹介部分である。ア版、イ版、訳、の順に挙げる。

The man was Boston Blackie. Concealed behind the oaken panels he inspected so painstakingly was a safe in which lay the Wilmerding jewels a famous collection.

For two generations San Franciscans had eyed them with envy. Handed down from mother to daughter they had played their part in the social warfare of the city of the Golden Gate for half a century. And Blackie was there to make them his own.

He ran acutely sensitive fingers..... (12-13頁)

(この男が Boston Blackie である。

金庫は彼が入念に調べ上げたオーク材の壁板の裏に隠されており、その中には Wilmerding の宝石 著名なコレクションが蔵されていた。

2世代の間、サンフランシスコ市民が羨望の眼差しで宝石を見ていた。母から娘へと受け継がれた宝石は、半世紀の間、金門湾の都市の社交界の争いの中で、その役割を果たしてきた。そして、Blackieがその宝石を自らのものとするべくここにいたのである。

彼は鋭いほど敏感な指を探らせていた……)

The man was Blackie, a Raffles among crooks, who lived by pitting skill and daring against the best safeguards a property-loving world has devised for its own protection, and risking liberty and life on the issue of the game. Concealed behind the oaken panels he inspected so painstakingly was a safe in which lay the Wilmerding jewels a famous collection. Blackie was there to make them his own.

He ran acutely sensitive fingers...
...(231頁左)

(この男が Blackie、悪人の中の Raffles で、腕前を競い合い、富を愛する側の者たちがその保護のために腐心した最高の防犯システムに挑み、そのゲームの結果に自らの自由と人生を賭けることで生きている男だった。金庫は彼が入念に調べ上げたオ

ーク材の壁板の裏に隠されており、その中には Wilmerding の宝石 著名なコレクションが蔵されていた。Blackie はその宝石を自らのものとするべくここにいたのである。

彼は鋭いほど敏感な指を探らせていた……)

是人名勃雷基。梁上君子之流而獨以技著。有膽勇。富智謀。生平喜與為人保護財產之徒爲難。往無不利。恃以爲生。每以生命自由爲成敗之孤注。壁板之内。有保藏箱焉。威廉丁氏之家珍盡藏於是。價值之巨。蒐羅之富。無遠近皆知之。勃雷基今夜之來。欲致此物爲己有也。以十指疾探壁板覓機括。(1頁上,句点は原文のまま,以下同)

(この男が勃雷基、泥棒を生業とし、ただその腕前で名を知られ、大胆・勇敢で、才知・策略に富んでいた。生まれてこの方、財産を守ろうとする人々を困らせることを好み、これまでに捕まったことは無く、それを頼みに生き、いつも自らの生命と自由を賭けて成功か失敗かのゲームをしていた。金庫は壁板の裏にあるのだった。威廉丁家の宝石がすべてそこに蔵され、その価値の大きさ、収集の豊かさは、遠近を問わず皆が知っていた。勃雷基が今夜、やって来たのも、その宝石を自らのものとするためだった。(彼は)十本の指ですばやく壁板を探り、金庫を隠している板を探していた。)

3者を比較すると、翻訳はイ版に近い。ちなみに、主人公の呼び方について、ア版では「Boston Blackie」がこの部分を含めて文中に9か所見られる。イ版はすべて Boston を略し、「Blackie」に作る。翻訳もすべて“勃雷基”とし、“波士頓”(Boston)は無い。もう1か所、最後に Blackie が電報を出す場面を挙げる。

When they reached the downtown district, Blackie had Mary drive him to the Palace Hotel. There he sought out the night stenographer.

“ Will you take a telegram for me, please,” he said. Then he dictated:

“ ‘ To Martin Wilmerding, Del Monte Hotel, Monterey:

“ ‘ The boy needs you. I do too. Please come.

“ MARIAN. ’ ”

Though there was a telegraph-office in the hotel, he summoned a messenger-boy from a saloon and sent the message.

Then he went to another hotel and found a second stenographer, to whom he dictated a second message.

“ ‘ Mrs.Marian Wilmerding, 3420 Broadway, San Francisco:

“ ‘ The packages you gave me were what I really wanted. Thank you and good-by.

“ D.L. ’ ”

Summoning another boy, he sent the second message from a different

telegraph office. (34-35頁)

(彼らが商業地区まで来た時、Blackie は Mary に Palace ホテルまで運転するよう言った。そこで、彼は夜番の速記係を見つけた。彼は「私に代わって電報を1通引き受けてくれないか」と言った。そして書き取らせた:

「 Martin Wilmerding 宛, Del Monte ホテル, Monterey: 『子供が貴方を必要としている。私もです。帰って来て。MARIAN』」

ホテル内にも電報局があったけれども、彼はホールから伝言係を呼び出し、伝言を送った。

それから、彼は別のホテルへ行き、第2の速記係を見つけ、第2の伝言を書き取らせた。

「 Marian Wilmerding 夫人, 3420 Broadway, San Francisco: 『貴女が渡してくれた包みが私の本当に欲しいものでした。ありがとう、さようなら。D.L.』」

別の伝言係を呼び出し、彼は第2の伝言を異なる電報局から送った。)

On the way he stopped at a telegraph office, and sent the following:

“ To Martin Wilmerding, Del Monte Hotel, Monterey. ”

“ The boy needs you. I do too. Please come.

“ MARIAN. ”

A second message:

“ Mrs.Marian Wilmerding, 3420, Broadway, San Francisco.

“ The package you gave me were what I really wanted. Thank you, and good-bye.

“ D.L. ” (237頁右)
 (途中、彼は電報局で車を止め、以下の文を送った:

「 Martin Wilmerding 宛, Del Monte ホテル, Monterey: 『子供が貴方を必要としている。私もです。帰って来て。MARIAN』」

第2の伝言は:

「 Marian Wilmerding 夫人, 3420, Broadway, San Francisco: 『貴女が渡してくれた包みが私の本当に欲しいものでした。ありがとう、さようなら。D.L.』」)

至一電局。勃雷基發電至蒙脱旅館曰。
 “ 馬丁威廉丁鑒。兒思君甚。儂亦爾。幸即歸。梅里恩。 ” 至他局。又發一電致梅里恩曰。

“ 小匣六事。正我所需。謹領謝。並告別。唐尼上。 ” (12頁上,括弧は補った,以下同)

(ある電報局に着くと、勃雷基は蒙脱ホテルに電報を打った。

「 馬丁威廉丁様。子供が貴方をとても恋しがっています。私もです。どうか早く帰って来て。梅里恩」別の電報局に行き、もう1通、梅里恩に電報を打った。

「 小箱6個が正しく私の欲しいものでした。頂戴いたし感謝申し上げます。

ます。そしてお別れ申し上げます。
 唐尼拝」)

3者を比較すると、翻訳が、Blackie 自身が電報を出している点は、イ版に近く、異なる電報局から出している点は、ア版に近いと言える。ただ、ア版に基づいたとすると省略が多すぎるので、やはりイ版に近いと言える。上記2か所の比較から、中国語訳は、イ版の Strand 誌に基づく断じたい。以下の引用はすべて同誌に拠る。

他に訳されていた場合の原作探求の手掛かりになると思うので、主な固有名詞の対照表を掲げる。

原作	中国語訳
Blackie	勃雷基
Martin Wilmerding	馬丁 威廉丁
Marian	梅里恩
Don(ald Lavalle)	唐尼
Mary	梅利

書名について、原題は「 Blackie's Little Pal」(Blackie の小さな友人 ア版は「 Boston Blackie's Little Pal」)で、Blackie 自身がその勇氣に一目置き、彼のためにおせっかいを焼いた、4歳の Martin Wilmerding Jr. を据えている。中国語訳は“ 宵人一夕 ”(悪人の一夜)とする。中国の読者の多くが Blackie になじみが無いと考えた訳者の判断で、内容全体を表す名前にしたのはやむを得ない改訳だと思う。

内容については、物語通りに丁寧に訳していると思う。ただ、他の翻訳についても言えることだが、人物が台詞を話す際の表情の描写を所々省略している。また、Don と Marian との関係を述べる部

分にかなり加筆が見られる。加筆部分を1か所挙げる。

He stooped over her eagerly.

“ You tell me that, and expect me to leave you here! ” he whispered.

“ Never! In saying you love me, you have decided. Come Marian, come. ”

For a second their eyes met. His were eager, ardent, passionately tender. To a woman grown reckless through neglect, they pleaded his cause better than words. She crouched by the vanishing fire, weighing her problem.(235頁左)

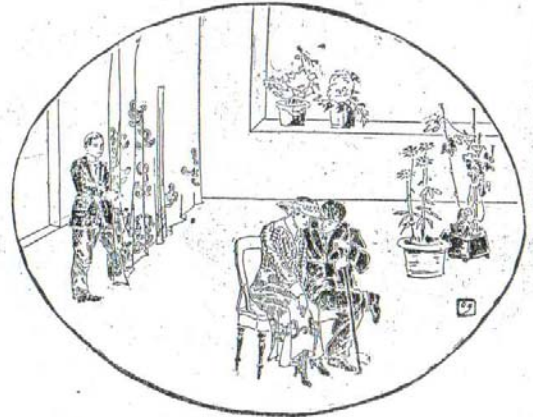
(彼はぐっと彼女を覆うように身体を傾けた。

「貴女がそう話すのは、僕が貴女をここに残していくと思っているんだね!」彼はささやいた。「絶対にしない! 僕を愛していると言ったということは、貴女はもう決心したんだ。来てくれ、Marian、来てくれ。」

1秒間、2人は見つめ合った。男の目は熱く、激しく、情熱的な愛がこもっていた。無視されてきたためにすべてがどうでもよくなっている女性に対して、男の目は言葉よりもよく言いたいことを語っていた。彼女は消えつつある暖炉のそばにしゃがみこみ、自身の問題について熟考した。)

男子亟俯身低聲懇摯言曰：“梅里恩。吾知之。吾已解爾意。爾之爲是言。

取其箱中所有
空手歸來者誰
恐心無良私出
于於時則聞摩
日遠而近止於
又思曰此殊不
有爲兒之母者
入此室中燈火
無論其爲誰吾
未有危念一簞
可從此窗遠外
又有梅利以摩
避離盡出全城
外莫如我何也
聲漸止有人聲
外而入勃雷基



曰乃有一女
可觀者
敢模糊
有旋轉
火立然
見一婦
男子亦
男子言
於地玉
見編轉
事煩憂
子曰吾
長投吾
當時且
曰梅里

小説月報 第九卷 第九號 西人一夕

殆思減我愛爾之心。使我舍爾而行耳。雖然。吾愛爾之心。決不因爾言而少減。自爾有愛我之言。我心即決。人之愛情。斷無遊疑兩可者。卿心已屬我。更無人可得而分據。來乎梅里恩。從我赴安樂之鄉也。”

二人乃目光相接。婦人默無言。爾時男子殷摯之色。溢於眉宇。其力十倍於言。婦女之觀人。先察其情。次乃及言。蓋語言有時而僞。情則可以神色而辨其虛實。此時男子殷摯之色。已自達其五中情思。直抵婦人心中。婦人觀之。洞然皆見。意亦大動。顧不即決。退坐爐次椅中。竊權此問題輕重。(6頁下-7頁上, コロンは補った)

(男はすぐに身をかがめ、低い声でやさしく言った「梅里恩、それを知って、僕は貴女の気持ちがあったよ。貴女がそう言ったのは、恐らく僕の貴女への愛が薄れたので、貴女を捨てて行ってしまおうと思ったからだね。だったら、貴女への愛は、貴

女が言うように薄れたりとは決してしない。貴女が僕を愛していると言ってくれたから、僕の心は決まったんだ。愛する気持ちは、ためらったり迷ったりは絶対にしない。貴女の心は僕とつながっていて、もう誰も割って入ることはできない。来てくれ、梅里恩。僕と一緒に地上の楽園へ行こう。」

2人は見つめ合った。彼女は黙っていた。その時、男の真剣な気持ちは眉間に溢れており、その力は言葉の数百倍だった。女性が人を見る時は、まずその心を吟味し、次に言葉に移るものである。言葉は時々うそもあるが、心となるとその態度から本当かうそかを判断できてしまう。この時、男の真剣な気持ちは、すでに身体の奥にまで達し、そのまま彼女の心に届いていた。彼女は男を見て、明らかに気持ちが大きく動揺しているようだった。しかし、すぐには決心せず、暖炉のそばの椅子に座り、一人で問題の重大さを量っていた。))

中国語訳は、かなり加筆して熱く語っているが、内容としてはあまり前後とうまくつながっているように見えないので、必要性は乏しいと思う。

4

相違個所の比較から、中国語訳は Strand 誌に基づくと断じた。その場合、先ほどは触れなかったが、雑誌の刊行時

期で矛盾が生じる。Strand 誌56-334刊行は、1918年10月、小説月報誌9-9刊行は、1918年9月25日である。前者が表示より早く刊行されていたと考えることもできるが、仮に1か月早く9月に刊行していたとしても、中国に到着する頃には表示どおりの10月になっていただろう。故に、ここでは、小説月報誌9-9刊行が表示より1,2か月遅れていたと推定しておく。

日本には来なかった*4 怪盗 Boston Blackie が、原作発表とほぼ同時期に中国に上陸していたことを明らかにした。雑誌掲載から僅か2か月で映画化されるほどの人気短篇を、英国の雑誌からではあるが、すぐに選んで翻訳した訳者の能力は高く評価されるべきだと思う。 罍

【注】

- 1) 本作は、同じ『Boston Blackie's Little Pal』という名前で、1918年8月26日からアメリカで上映された。
- 2) この、車で待っていた Mary の台詞の段落が単行本では抜け落ちており、前後で意味が通じなくなっている(34頁)。
- 3) 単行本では、「Chapter II Boston Blackie's Little Pal」と「Chapter III Boston Blackie's Code」の2章に分かれる。
- 4) 管見の及ぶ限りでは、Boston Blackie ものももとより、Jack Boyle 作品自体の日本語訳は見出せなかった。

【参考文献・ホームページ(HP)】

郭浩帆「張毅漢 - 一位被遺忘的小説家」
- 『清末小説』第26号, 清末小説研

研究会, 2003年12月1日
 William G.Contento 管理HP「The Fiction Mags Index」
<http://www.philsp.com/homeville/FMI/Ostart.htm> (2012年10月9日確認)
 Geni, Inc. 管理 HP「Family Tree and Family History at Geni.com」
<http://www.geni.com/people/Jack-Boyle/6000000012494636538> (2012年10月9日確認)
 IMDb.com, Inc.管理HP「IMDb(The Internet Movie Database)」
<http://www.imdb.com/title/tt0182850/>(2012年10月9日確認)
 Kevin Burton Smith管理 HP「The Thrilling Detective Web Site」
<http://www.thrillingdetective.com/boston.html> (2012年10月9日確認)

份有限公司、上海古籍出版社2009.1
 苗 懷明 『二十世紀中国小説文献学述略』北京・中華書局2009.4
 朱 安博 『歸化与異化：中国文学翻訳研究の百年流变』北京・科学出版社2009.4
 顧 鈞 『魯迅翻訳研究』福州・福建教育出版社2009.4
 張 仕英 『清末小説研究 李伯元の小説を中心に』アジア文化総合研究所出版会2009.4.15
 任 淑坤 『五四時期外国文学翻訳研究』北京・人民出版社2009.5
 周新民主編 『中国近現代名人生平暨生卒年録：1840-2000』北京・經濟管理出版社2009.5
 楊義主筆、楊義、中井政喜、張中良合著 『中国現代文学図志』北京・生活・読書・新知三聯書店2009.5
 楊義、張中良、中井政喜著 森川(麦生) 登美江、星野幸代、中井政喜訳 『二十世紀中国文学図志』学術出版会2009.6.30
 陳建華編 『文学的影響力 托爾斯泰在中国』南昌・江西高校出版社2009.6
 羅振亜、李錫龍主編 『現代中国文学(1898-1949)』天津・南開大学出版社2009.6
 王 潔群 『晚清小説中の西方器物形象』湘潭大学出版社2009.7 中外文学与文論叢書第1輯
 管林、鍾賢培主編 『中国近代文学發展史』北京・科学出版社2009.7
 陳 建華 『從革命到共和：清末至民国時期文学、電影与文化的轉型』桂林・広西師範大学出版社2009.10
 連 燕堂 『二十世紀中国翻訳文学史 近代卷』天津・百花文藝出版社2009.11

清末小説から

過去の掲載と重複するものがあります

鄧 偉 『分裂与建構：清末民初文学語言新变研究(1898-1917)』北京・中国社会科学出版社2009.1
 吳 鈞 『魯迅翻訳文学研究』濟南・齊魯書社2009.1
 夏 曉虹 『晚清上海片影』上海世紀出版股

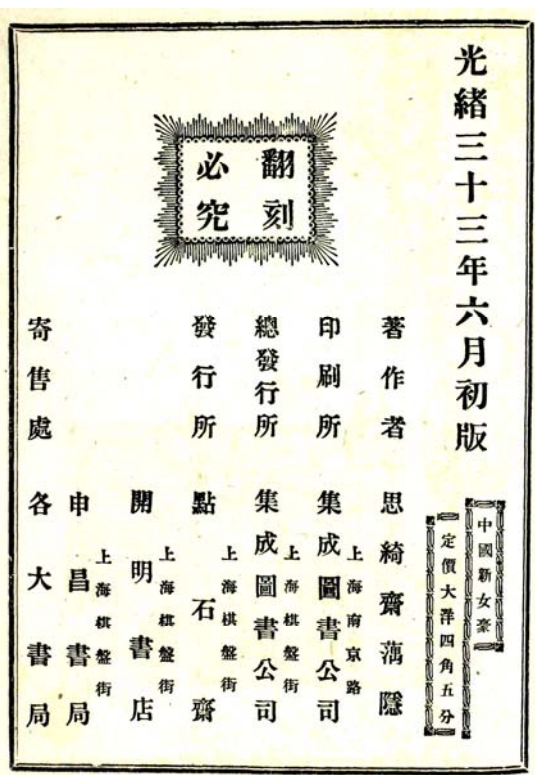
思 綺 齋 的 身 份

魏爱莲著 赵颖之翻译

这篇文章的目的是为了证明晚清作家思绮斋和来自衢州的詹塏——也称作幸楼主人——是同一人。我的证据可以分成三个部分。随后我还要简单介绍一下詹塏。

1. 思 綺 齋 即 是 詹 塏 的 证 据

A. 思绮斋是三部晚清小说的作者，这些小说是《中国新女豪》(1907年农历6月，但是序言作于1906年)、《女子权》(1907年农历6月)、《碧海珠》(1907年农历9月)*1。詹塏是关于上海妓女的三部短篇传记的作者。第一部是《柔乡韵史》，出版于1898年，但是在1914、1916、1917年再版，也许还有1907年的版本。根据序言此书作者是“衢州幸楼主人詹塏”*2。第二部《花史》出版于1906年。序言署名衢州 詹塏紫萼，但是浙江图书馆所藏的版本封面上署名“思绮斋著”，最后一页上的印是“思绮斋印”。第三部是《花史续编》。这本书没有序言。它出版于1907年农历10月。浙江图书馆藏本的封面上署名“思绮斋著”，最后一页上的印是“思绮斋印”。这



些证据几乎使我们可以断定思绮斋和詹塏是同一人。

B. 在《花史续编》末尾是妓女的四部短篇诗选。第一部是《彭鹤俦诗选》。在詹塏为彭鹤俦所作的简短介绍中，他提到她生平的一些细节可以在《碧海珠》中找到，“其生平略详于碧海珠说部中”*3。其隐含意义是他本人写了《碧海珠》，尤其是因为思绮斋这个名字可以在《花史》、《花史续编》、《碧海珠》中找到。思绮斋的小说《碧海珠》描写了两个妓女，金小宝和彭鹤俦，詹塏为妓女所做的传记中提及这两人。这进一步证明了上文做出的论断。

C. 第三部分证据更直接。小说《中国新女豪》有“思绮斋蕩隱”所作的序言，虽然第一页上的作者是“思绮斋”，而不是“思绮斋蕩隱”。《花史》书名页

上有“幸楼著”和“滿隱編”。我们不完全清楚滿隱是否是詹塏，但是看起来可以确定的是思绮斋是詹塏。此外，在思绮斋关于妓女的小说《碧海珠》和詹塏的妓女传记的人物之间有相当大程度的重合（《柔乡韵史》、《花史》、《花史续编》）。例如，《碧海珠》有两首题词的作者是陈洙和鬢因女士。陈洙的名字出现在《花史续编》第22页，他为詹塏的小说增添了一项附录。陈洙是晚清民初的编者和出版者。此外，我们从《花史》第19页得知妓女李苹香的佛教名字是鬢因女士。在《花史》前言中，詹塏明确写道李苹香是他的朋友*4。思绮斋的作品和詹塏作品中共同的名字是证明两人是同一人的直接证据。

2. 詹塏的背景

詹塏来自浙江衢州。他的兄长是《花柳深情传》的作者詹熙(1850-1927)。两人的父母是詹嗣曾和王庆棣*5。出版于1926年由郑永禧所作的《民国衢县志》上詹塏的条目下写道：“塏字子爽，号穉瞿。光绪乙酉拔贡。尝居沪上卖文，隐其姓名，自号幸楼主人。盖隐触时事，不欲以此自炫也。故歿后传稿亦稀。”*6同书的另一条条目写道：“年四十九歿于申江旋次。”*7”

詹塏的生平很难系年。很可能1908-1909年他仍然健在，因为在1908年8月和1909年1月间他的《中国新女豪》在《广益丛报》上重印*8。其他证据表明此后不久的1910年他仍然健在，可能他活到了1911年，因此他出生于1862年左右。这样他大约比兄长年轻12岁。 罍

- 1) 关于他出版小说的更多问题，参见樽本照雄，《新编增补清末民初小说目录》，济南：齐鲁书社，2002年。三部小说中的两部有现代重印本，因此很容易找到。《中国新女豪》不易找到，藏于上海图书馆珍本书室。根据江苏省社会科学院 明清小说研究中心 / 文学研究所编选的《中国通俗小说总目提要》，北京：中国文联出版公司，1990年，第1280-1281页，此书也藏于四川省图书馆。《广益丛报》中有此书的重印，1908年8月16日至1909年1月1日（光绪34年农历7月20日至12月10日）。《广益丛报》藏于上海图书馆珍本书室。
- 2) 1898年本藏于北京大学图书馆和复旦大学图书馆。
- 3) 《花史续编》出版于《碧海珠》仅仅一个月以后。
- 4) 他在前言中用了李苹香的另一个名字谢文漪。关于李和谢是同一人，请参见《花史》第20页。
- 5) 郑永禧，《民国衢县志》，上海：上海书店，1993年，第72、313、332页。
- 6) 第72页。
- 7) 第300页。
- 8) 樽本照雄，第957页。

魏爱莲 (韦尔斯利学院 Wellesley College)

杨味西及其《时新小说》略释

傅兰雅“时新小说”征文参赛作者考(四)

姚 达 兑

一、生平及作品略举

杨味西所著《时新小说》三十回(《清末时新小说集》第三册)*1。与刘忠毅的《无名小说》并列获第九名,各得奖金六元。

杨味西,湖北宜昌人,属教会中人。曾是花之安(Ernst Faber, 1839-1899)和安保罗(Paul Kranz)等传教士的文学助手;曾在《万国公报》、《中西教会报》、《天足会报》和《大同报》等报刊上,发表了一批针砭时弊的作品。

杨氏其人名不见经传,仅有寥寥几条线索可知其生平。安保罗在其所著的《论语本义官话》(1910)中称:“中华茂才彝陵杨味西,襄助予录写,经历五个月而书成。杨君前曾相助花君之安为书记。”*2

(1) 彝陵。又作夷陵,属湖北宜昌。雍正十三年(1735),彝陵州升为宜昌府,彝陵县改为东湖县,隶属于宜昌府。清代乾隆年间吴省钦(1729-1803)曾撰文辨明彝陵是王陵还是地名的问题,认为在白起烧彝陵前属王陵,后衍为地名。白起烧彝陵一事,是彝陵见于史书之始。此文收入《东

湖县志》*3。杨味西的籍贯是彝陵,清末时属湖北东湖县。1912年后,该县改为宜昌县。(2) 传教士书记。中国文人作为传教士写作时的书记或译助,是汉语基督教文学中的一个常见现象。韩南先生在其开创性的论文《汉语基督教文献——写作的过程》中就强调了传教士译助的重要性:

“这些助手,虽无作者之名,但在写作过程中所起的实际作用,远甚于有作者之名的传教士。”*4杨味西作为花之安的书记始于何时,未得知晓。1865年,花之安作为德国礼贤会(Rheinische Missionsgesellschaft)的传教士来华,初至香港,后在广东岭南一带行医、传教。花氏在广东时期,就著有《大德国学校论略》、《自西徂东》等书*5。花氏另一本著名的作品《经学不厌精》*6,却是写成于上海。1885年花之安脱离了礼贤会,转赴上海。他在上海呆了十三年。1898年,德国占领青岛后,他又转赴青岛。翌年在青岛逝世。在上海时期的花之安喜欢用儒家思想来诠释基督教教义,或者相反,用基督教教义来诠释儒家经典,如《经学不厌精》及其续篇诸作便是。杨味西作为花之安的助手,正是在这一时期。杨味西是花之安的文学助手,而他们合作的作品风行一时更证明了杨氏的文学才能。因而笔者的猜测是:花之安将其介绍给安保罗认识;时间或许是在花之安离开上海转赴青岛时,即1898年左右。花之安逝世后,安保罗为花之安整理文稿,出版了花之安的遗著《经学不厌精遗编》和英文版的《中国历史编年录》(为《经学不厌精》的姐妹篇所准备的文稿),并以英文为花之安写了一本传记《花之安:基督信仰的代言人及其作品》*7。《经学

不厌精》以基督教教义诠释中国经典的做法，大受传教士们欢迎，促使教士们认同这样的传教策略，即利用“教义争胜”的方法，潜移默化地改变中国的读书人。所以安保罗依照他的前辈花之安的做法，也以基督教义解释中国的四书。安保罗和杨味西所著的《论语本义官话》，即是《四书本义官话》中的一本。

杨味西还在《万国公报》和《中西教会报》等杂志上发表了一些文章。笔者所见杨味西最早的文章是发表于1878年《万国公报》的《马礼逊列传》*8。该文是仅有三页的小传，盛赞马礼逊的开拓传教之功，认为“马君一生勤慎，耶稣教士至华之冠领也；专心任事二十有七载，或政事、或教事，毋稍懈怠；声名传于中外，至今弗替，令人景仰不已。”*9这是中国人用汉语写就的第一篇马礼逊传记，意义不小。这也可能是杨氏发表的第一篇文章，发表时他应该很年轻。这一篇传记，在二十九年即1907年，被重新连载于《中西教会报》，因为这一年距离马礼逊来华整整一百年*10。从1878年写作《马礼逊列传》到1895年参加傅兰雅在《万国公报》、《中西教会报》和《申报》上发起的小说征文比赛，两者间隔十七年。又十五年之后，他襄助安保罗撰著《论语本义官话》。因而可知杨味西是《万国公报》和《中西教会报》的资深作者和读者，几十年间也一直是传教士的译助。他参与傅兰雅的小说竞赛，并获得了较前的名次。或许正因此，其它传教士认识了他，也愿意竞聘其为写作助手。但是杨氏还有其它的文章，证明他一直在这个领域活动，并对傅兰雅所提出的社会三弊和社会改良，深以为然。

杨氏的其它文章，列举如下：（1）作为安保罗的译助，杨味西还在《万国公报》上发表了一篇名为《泰西名人基督赞言》（1906）的文章。此文列举了拿破仑、非德利克第一（普鲁士国王）和路易司王后等八位欧洲名人对基督的赞美。如拿破仑说“基督之福音，有奥妙之能力，可以光照斯世，深入人心。”*11如非得利克危连王子说，“耶稣教之精微，非在仪文，是在生命之神，并爱真理之心。”*12该文借王公贵族之口，赞美基督，以期劝服一般读者。（2）1906年，杨味西于《中西教会报》发表了《圣子论》一文，论述“圣子”和“三位一体”的概念。但是杨氏的论述其实夹缠不清，以致于伦敦会藏书中有匿名读者朱笔批注如是：“此论作断章取义及咬文嚼字二弊。”（原文如此）*13（3）与英国传教士莫安仁（Evan Morgan, 1893-1949）合译《百年大会集议》一文。1907年4月25日到5月8日，在马礼逊来华百年之际，众新教传教士聚集在上海开会，深入地总结过去的经验，也展望未来的走向。有人将会议记录整理成文，不久莫安仁和杨味西又将其译为中文发表在《中西教会报》上*14。（4）杨味西对傅兰雅小说征文提出的三弊，大为赞同，也发表过一些作品针砭时弊、讨论社会和教育改良。1907年，在上海《天足会报》上发表了《徐烈妇逼死之冤》一文，又于上海《大同报》上发表论学政《日本维新教育报告》和《欧洲崇尚和平之目的》两文*15。《大同报》（Chinese Weekly）发行于1904-1912年，乃属广学会除《万国公报》和《中西教会报》之外的另一机关报，也是林乐知（Young John Allen, 1836-1907）等传

教士所办。而《天足会报》创于1907年上海，则为中国天足会报办，其宗旨为“劝导不缠足，提倡放足”^{*16}（5）1907年1月的《中西教会报》上，还发表了他的另一篇关于教会史的文章《福州奋兴会丛录书后 附：记福州奋兴会之缘起》^{*17}。

二、杨味西的《时新小说》

小说依次攻击三弊。每一部分都是先叙故事，再引起讨论，最后给出解答的方案。整个故事的概要如下：苏州李员外的大女儿因缠脚而病亡。虽是如此，李家小女儿翠英仍是不愿放足。后来战乱一起，齐家逃乱。李夫人缠过足，脚小难行，与家人失散后，怕受辱而投河自杀。李员外最终一家逃入了济南城安歇。一日，李员外路遇旧友陈善人。陈邀李去家中座谈。两人讨论了缠脚之害。陈提起他曾写过一篇时文，辨析的正是“缠足”的渊源、危害，并吁求放足。此为第一部分。李翠英后嫁纨绔子弟孙公子。孙氏婚后整日寻花问柳、留连妓院，旋复染上鸦片恶习。孙氏为抵烟瘾，卖尽家产，家中无粒米下锅，遂沦落为丐。恰又被李家家仆撞倒其行乞。家仆请李员外上街，捉孙公子回家。事后，李员外转头又去找陈善人讨论鸦片的危害。陈善人出示他曾撰的一篇长文，论述的正是鸦片的危害和解弊之法。此为第二部分。陈善人家邻有王先生进京赴考，但是名落孙山归来。他回到家中，备受家人冷落，一时想不开，竟去投井自尽。巧遇族叔见到，被劝阻归家。陈善人即又与李员外讨论此事，又找出一文，批判的也正是时文之害。此后，陈善人提及了他颇为赞赏的贾书生。贾氏从西洋学成归来，与凭时文



[图一：各国装扮图]

中得科首的状元郎比赛实学，最终胜出。结论是西洋实学远胜时文。那么，如何完全根除三弊呢？陈善人即日赴京投书，奏请去除三弊。小说结束于陈善人在客舍中，等候皇帝的消息，未知结果如何。此为第三部分。

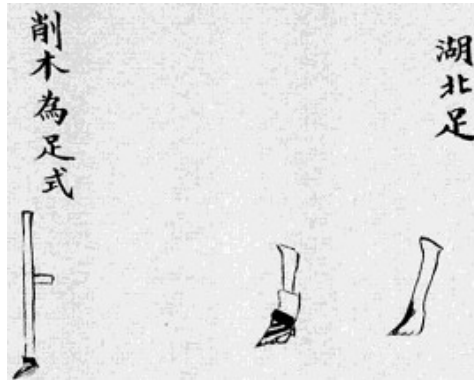
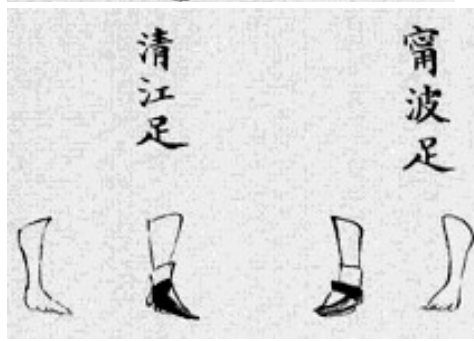
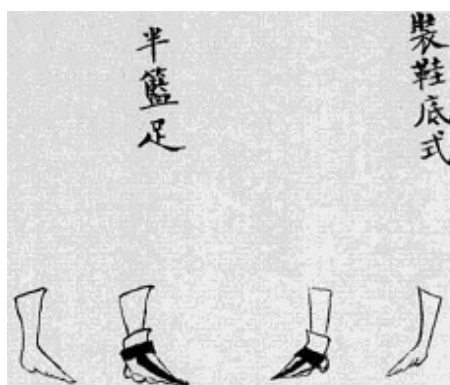
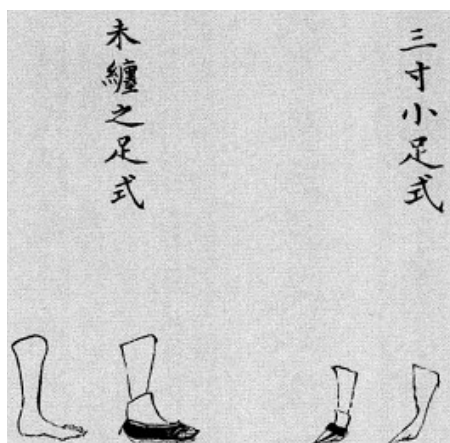
这部小说能获较前名次，说明还是具有一定的艺术水准，也符合傅兰雅征文的某些要求。为明乎其特别之处，权从三方面 插图、结构、时文与西学的对比，略释如下。

(1)插图

在小说的第一章中，李员外闻得大女儿因缠脚而哭得死去活来，遂对“缠足”一事，大发议论。其妻李夫人接过话头，论述各国风俗如何，缠足则是中国本土风俗，虽有弊处也不能免俗。李夫人说，“且风俗各处皆有闻得。有一国的人缠札其头，令他尖小，要人好看；又有一国的人，周身针刺，绘画鸟兽花草在身上，不穿衣服，要人好看；又有天竺国的人，用一圈子穿在鼻上，要人好看；又有一国的人，缠束腰，令其瘦小；又有亚美利加人，用物穿其下颌。此种行为总是风俗。女子缠足也是风俗，不能不从风俗也。”（页213-216）此处作者配“各国装扮图”一张，精工细描，以说明“各处的人做作的样子”（见图一）。

第二回“李夫人评论金莲”，也配有好几张小图，详尽地描绘了各地缠足的样式。

李夫人在这一回中，对各地缠足的样式，作了深入的讨论，又指出缠足在“富厚之家”尤其常见。“尝见富厚之家，代女缠足，或亲自操劳，或命婢仆从事，逐日缠束，层层紧札，必至断其脚骨，而后可望其小。折断脚骨，儿女受无穷的痛苦矣。其故因将活肉缠成死肉。肉死则红肿腐烂，血出脓流，湿透脚布。每逢洗濯，臭气难闻，损伤其脚如此。由此脚上有百病丛生。因紧札而致朽烂，因朽烂而致脓血，而成疮痍。延医诊视，用药搽涂，而排脓定痛的缘故。”（页233-235）这已是将缠足致病的情况作了病理学的分析。如此详尽的描述，足让读者对缠足心生厌恶，



[图二：“夫人所说各处女人的脚式样不一。稗官因描画成图，以证明各处脚样。”（页228-231）]

而对受苦者心怀怜悯，促使人们确认“放足”是为当务之急。

明清绣像小说系统中小说历来便有插图，以佐理解文字。左图右史，插图是与文字互补，也充当起解释小说，使其更通俗易懂的职能。晚清传教士小说，诸如《天路历程》、《人灵战纪》和《辜苏历程》等作，都附有几十幅的插图。陈平原先生便曾讨论过：“《天路历程土话》的三十幅插图展示了天路历程的主要情节，如同中国‘绣像小说’传统一样，这些图像本身具有某种独立性，客观上具有独立叙事的功能。”*18杨味西小说的插图可能仅是作为补充的说明，目的在于打动作者，也在于说服有批评要求但又对现实状况稍隔阂的传教士评委。杨氏的《时新小说》除上面引述的两处插图外，还有其它插图，皆可作绣像小说式的补充说明。诸如“延医诊治图”指向的情节是李家小女儿因缠足致病而请医生救治一事；如“逃难受困图”指向的是李家逃兵乱（太平天国运动）时，李夫人因脚小无法行走而受困的情形。

(2) 结构

这部小说的结构安排，也值得一提。在很大程度上这部小说仍然不脱米怜教士（William Milne, 1785-1822）开创的《二友相论》的问答体套路——“这种形式有助于启发思考，方便表述各方论点，促进不同思想之间的交流。”*19在《二友相论》“可能是19世纪翻印次数最多的中文小说……该书创造的叙事框架数十年间一直深刻地影响着在华传教士的写作。”*20米怜的叙述框架是指他既借用了传统的章回体小说的表貌，行文则以基督教文献常见的

“教义问答法”模式，即以问答的模式引导信徒理解基本的基督教教义。这种问答模式作为叙述推动故事发展，而章回小说的表貌则将不同主题的往还问答，分门别类列为不同的章次。

杨味西的《时新小说》结构严谨，隐然是《二友相论》的问答模式，而在叙述方面略有增多，在议论方面更为深入。这是十九世纪汉语新教基督教文学经过半世纪多的发展后成熟的产物。小说共有三十回，每十回攻击一种时弊，依次针对的是：缠足、鸦片和时文。第一至十回，前几回着重叙述缠足的危害，第八至十回则是引出李员外和陈善人二友之间的讨论，如第九回的“陈善人高谈缠足源流”和第十回的“陈善人一申救弊法”。第十一回始，则又转向攻击另一种时弊即“鸦片”，第十一回至第十七回完成故事的叙述。第十九回至第二十回，又是李员外与陈善人二友间的讨论，最终以“陈善人畅谈烟瘾”（第十八回）、“陈善人二申救弊法”（第十九回）、“陈善人备述戒烟方”（第二十回）三回收尾。第三个主题的批判也如是，但是篇幅稍短，故事更直接地将矛头指向时文时弊。作者似乎唯恐这一部分过短，申论未详，又添加了一个故事以说明时文之弊。如果说王先生因时文不中式，落榜而受尽冷落，终至要寻短见，看作是时文对个人的残害，那么，状元郎凭时文得中而成为国家取士的人才，则和王先生的事迹成为正反两面的对比。作者意在表明时文对国家的残害更甚。若是一味陷入时文取士，不能“不拘一格降人才”，则国家永远难以富强。

全文三十回是一个完整的结构，又难免让

人料想到作者似乎在这种批判三弊的小说中，借用了“时文”的结构。与其说是借用，不如说是无法跳出“时文”的几段论的套路：破题、承题、起讲、四比和收合。小说破题、承题后，在每部分的起讲一段，插入了故事的发展，而在收合阶段则是陈善人出场，针对一种时弊作总结性的批评和救弊的方法。更进一层，在每一部分的“收合”阶段，作者又故伎重施，作起“时文”来，比如第九、十回，陈善人的“高谈缠足源流”和“一申救弊法”便是两篇带有时文风格的议论文。后面两个十回收合阶段也如是。

不嫌赘言，笔者重申一遍，这部小说在结构方面，有层层套嵌的奇巧。首先作为参赛的“时新小说”，在第一个层次上是在当时大家都不满时文的情况下新写的“时文”。时新小说作为要与时代的需要若合符节的文章，其载道性当然与“时文”的载道性相似，皆要以文章承担起拯救国家的重任。文章的功能性，在时文为治国平天下，在时新小说为攻击时弊，提出医国良方。在第二个层次，即小说文本的内部，整体的结构，随处可见时文的写作技巧。而在第三个层次，即每一个十回的结束处，又是一篇较为完整的时文出现。其实在这批“清末时新小说集”稿本中，用时文的方式来写“时新小说”并不少见。这说明了文人痼习已深，积重难返，“时新”未必如愿，一时也“新”不到哪儿去，反而传统的痕迹更重。与此相似，这批时文小说，无论是内容，还是技巧上，经常有根深蒂固的传统元素一再地重现。这是在研究这批小说时，不能回避的一个现象。

(3)时文与西学的对比

这批小说中，经常还会出现时人争论未休的中西“格致”之学（其实是中西两种知识系统）的比较。杨味西的《时新小说》在第二十九回“谈物理折倒状元”，引入了一个小故事，即受过洋教育的贾书生，与受过传统教育的文状元之间，关于“天下的雪为何能成这个样子”的讨论。当被问到这个问题，文状元迂腐的回答如是：“天以阴阳，五行化生万物，雪也是一物。”这种程式化的解答，俨然如“时文”破题式的反应，既未能引入新的知识，也未能促人思考。文状元接而被问五行是什么，又被追问：“雪还是金化的呢？还是木化的呢？还是水化的呢？还是火化的呢？还是土化的呢？还是阴化的呢？还是阳化的呢？”面对这种抢白，状元无语以答，只好承认“才粗学浅、真不晓得”。由此露出了时文教育弊害一面来。问话的贾书生曾在西方受过教育，理直气壮地解答道，“空气非是一种。细细地分开来，确有四种，一种叫做养气，一种叫做淡气，一种叫做炭气，一种叫做水气。这四种空气布满空中。水气因何而有？乃地面上的水所发的汽气散在空气内的。天气热的时候，人看不见。天气冷的时候，人就看见了。雪就是水气变化的。……水气遇着个冷就渐渐的凝结成冰。其冰极细，如同尘沙一样，彼此渐渐并拢来，就成了雪了。有六出的形象，仿佛是花。有时大片，有时成团作块，细细的来，都是小冰的颗粒并拢来的。所以说到雪是水气变化的。”（页425-427）

这可能是中国最早的讨论空气中组成元素的记录。毋庸置疑，这样的知识是源

于西方的现代科学。小说作者和十九世纪下半叶在《万国公报》上发表文章讨论儒耶两个系统孰为优劣的其他论者一样，最终的结论必定是：西方的现代科学如何先进，而中国则远未起步。以此来对比两种文明系统，得出孰为优劣，持论并不公允，也殊难服众。但作为批判时文，在行文中却能一时奏效。所以，小说中状元甘拜下风，自我批评如是：“先生见识高明，洞晓物理。我只晓做文章，反不晓得真实道理。只个文章，真是无用个。”（页427）陈善人见到状元学问不行，不禁暗叹道：“堂堂状元，被一书生难倒，文章真是无用个。我要劝世人，不要做文章，并缠足、鸦片二事。我要进京奏明皇上，若允准，便可风行无阻了。”（页430）

小说结束于陈善人进京上奏，在客寓中等候皇帝的消息，心中充满了对国家富强的期望。他“只得在客寓里俟俟，但不知俟俟到何日何时，方可以有信息呢？”（页433）这种结尾可见作者改良主义式的期望，有着其时的书生相似的不切实际的空想倾向。好处是这种悬而不结的结尾，能引读者深思。然而，这种结尾也不是仅见的例子。在其它参赛的小说中，也有作者做了相似的处理，比如在结尾时反问“未识傅兰雅先生以为如何？”*²¹可见，这批“时新小说”中各部文本有颇为相似和可比较之处。

㊦

（“时新小说”作者考系列未完待续）

（中山大学中文系博士生，哈佛燕京学社访问研究员）

【注】

1) 杨味西《时新小说》，收入周欣平主编：《清末时新小说集》第三册，上

海：上海古籍出版社，2011年，第199-435页。

- 2) [德]安保罗著：《论语本义官话》，上海：美华书馆，1910年，序，第二页。
- 3) 吴省钦《白起烧彝陵辨》，见[清]王伯心撰，《东湖县志》，台北：成文出版社，1975年，第610-611页。
- 4) Patrick Hanan, “Chinese Christian Literature: the Writing Process”, Patrick Hanan Ed., *Treasures of the Yenching*, Cambridge, Mass. Harvard-Yenching Library, Harvard University, 2003, pp.261-283. 见中译论文，韩南撰，姚达兑译《汉语基督教文献：写作的过程》，载《中国文学研究》，2012年第1期，第5-18页，见笔者为韩南先生论文所写摘要。
- 5) 笔者曾在澳门何东图书馆读过此两书原著。(德)花之安撰，《大德国学校论略》，羊城（广州）：小书会真宝堂，1873年；花之安撰，《自西租东》，羊城：真宝堂，1884年。
- 6) (德国)花之安撰：《经学不厌精》上海：美华书馆，清光绪22、24、29年（即1896、1898、1903年）
- 7) 花之安遗稿：《经学不厌精遗编》，上海：美华书馆，1903年。Pastor P. Kranz ed., Rev. Ernst Faber, *Chronological Handbook of the History of China*, Shanghai: The American Presbyterian Mission Press, 1902. 安保罗为花之安写的传记见：Kranz, Paul, D. Ernst Faber; *Ein Wortführer Christlichen Glaubens Und Seine Werke*, Heidelberg:

- Druck Vangelischer Verlag, 1901.
- 8) 杨味西《马礼逊列传(未完)》, 载《万国公报》第10年第506卷(1878-09-21), 《马礼逊列传(续)》, 载《万国公报》第10年第507卷(1878-09-28)。
- 9) 杨味西《马礼逊列传(续)》, 第5482页。
- 10) 杨味西:《马礼逊列传(未完)》, 载《中西教会报》复刊第177册(1907-05);《马礼逊列传(续)》, 载《中西教会报》复刊第178册(1907-06)。
- 11) (德)教士安保罗译德文, 杨味西笔述:《泰西名人基督赞言(未完)》, 载《万国公报》, 第一百八十五册, 1904年6月, 第22623页。
- 12) 同上, 第22626页。
- 13) 杨味西《圣子论》, 载《中西教会报》, 1906年6月, 第二页。又, 参澳大利亚国立图书馆电子版, <http://nla.gov.au/nla.gen-vn514201-130-s3-e>
- 14) [英]莫安仁译, 杨味西述:《百年大会集议》, 见《中西教会报》1907年7月, 第32页。
- 15) 杨味西《徐烈妇逼死之冤》, 载《天足会报》第1期, 1907; 又莫安仁译; 杨味西述《日本维新教育报告(续前)》(笔者未见此文的前一篇), 载《大同报》(上海)第4期, 1907年; 莫安仁; 杨味西:《欧洲崇尚和平之目的》, 载《大同报》(上海)第2、3期, 1907年。
- 16) 冯天瑜主编:《中华文化辞典》, 武汉: 武汉大学出版社, 2001年, 第587页。
- 17) 杨味西《福州奋兴会丛录书后 附: 记福州奋兴会之缘起》, 载《中西教会报》[复刊]第一百七十三册, 1907年1月。
- 18) 陈平原《晚清教会读物的图像叙事》, 载《学术研究》2003年第11期, 第112页。
- 19) 黎子鹏编注:《晚清基督教叙事文学选粹》, 新北市: 橄欖出版, 华宣发行, 2012年, 第2页。
- 20) 宋莉华著:《传教士汉文小说研究》, 上海: 上海古籍出版社, 2010年, 第60页。
- 21) 瘦梅词人《甫里消夏记》, 收入周欣平主编:《清末时新小说集》第五册, 上海: 上海古籍出版社, 2011年, 第331页。

清末小説から

野間信幸氏より資料の提供を受けました。感謝します

彭修銀、皮俊琚等著 『近代中日文藝学話語的転型及其關係之研究』北京・人民出版社2009.11

劉德枢著 劉德符編 『吾家家世』私家版2009.11

傅秋爽主編 『北京文学史』北京・人民出版社2010.3

王 曉元 『翻訳話語与意識形態 中国1898-1911年文学翻訳研究』上海外語教育出版社2010.3

倪 斯靈 『旧人旧事旧小説』上海世紀出版

- 股份有限公司遠東出版社2010.3
- 巖家炎主編 『二十世紀中国文学史・上冊』
北京・高等教育出版社2010.4 普通
高等教育“十五”国家級規劃教材
- 朱寿桐主編 『漢語新文学通史・上卷』広
州・広東人民出版社2010.4
- 藤井省三監修、鄧捷、藤澤太郎編集協力
『中国文学研究文献要覧・近現代文
学 1978-2008』日外アソシエーツ株
式会社2010.5.25
- 畢 新偉 『暗夜行路 晚清至民国的女性
解放与文学精神』広州・暨南大学出
版社2010.6
- 宋 莉華 『伝教士漢文小説研究』上海世紀
出版股份公司、上海古籍出版社
2010.8 海外漢文小説研究叢書
- 廖 七一 『中国近代翻譯思想的嬗变 五
四前後文学翻譯規範研究』天津・南
開大学出版社2010.10
- 伍 紅玉 『童話背後の歴史 西方童話与
中国社会(1900-1937)』台湾・学
生書局2010.11
- 張 振国 『晚清民国志怪传奇小説集研究』
南京・鳳凰出版伝媒集团、鳳凰出版
社2011.1
- 張人鳳、柳和城編著 『張元濟年譜長編』上
下卷 上海交通大学出版社2011.1
- 范伯群主編 『周瘦鵑文集』4冊 上海・文
匯出版社2011.1
- 元青主編、王建明、王曉霞等著 『中国近代
出版史稿』天津・南開大学出版社
2011.2
- 宋原放主編、汪家熔輯注 『中国出版史料・
近代部分補卷』上下冊 武漢・湖北
教育出版社2011.2
- 朱禧、劉德平編 『一簣煙雨任平生 厚沢
文存』私家版 刊年不記(2011.3)
- 樽本照雄編 『清末民初小説目録』第4版
日本・清末小説研究会2011.3.31
- 電字版
- 邱 培成 『描繪近代上海都市的一種方法
《小説月報》(1910-1920)与清末
民初上海都市文化研究』南京・鳳凰
出版伝媒集团、鳳凰出版社2011.6
- 唐 宏峰 『旅行的現代性 晚清小説旅行
叙事研究』北京師範大学出版社
2011.7 現代文藝与文化轉型叢書
- 馮 志傑 『中国近代翻譯史・晚清卷』北
京・九州出版社2011.7
- 王 志松 『小説翻譯与文化建構 以中日
比較文学研究為視角』北京・清華大
学出版社2011.9
- 劉 宏照 『林紓小説翻譯研究』上海世紀
出版股份公司、上海訳文出版社
2011.10 学人論叢
- 陳思和、王德威主編 『建構中国現代文学多
元共生体系的新思考』上海・復旦大
学出版社有限公司出版2012.1 慶祝
范伯群教授80年誕暨學術生涯60周年
- 胡 全章 『晚清小説与文学轉型』北京・中
国社会科学出版社2012.1
- 楊 霞 『清末民初的『中国意識』与文学
中的『国家想像』』南京師範大学出
版社2012.5 青年学者文叢
- 藤井得弘 能吏から探偵へ 清末探偵小説
『中国女偵探』の仕掛け『饕餮』第
19号 2011.9.23
- 池田智恵 「黒幕」に挑む探偵と怪盜 中
国近代探偵小説における本土化の一
側面 関西大学『東アジア文化交渉
研究』第5号 2012.2.1
- 池田智恵 ホームズを想像・創造する 近
代中国における探偵像の形成につい
て『現代中国』第86号 日本現代中
国学会2012.9.30
- 宋 莉華 19世紀伝教士漢語方言小説述略
『文学遺産』2012年第4期 2012.7.
15

- 宋 莉華 《辜蘇歷程》：《魯濱孫飄流記》的早期粵語訳本研究『文学評論』2012年第4期 2012.7.15
- 王 晶晶 双向“再詮釋” 論包天笑的訳作《鬻兒就學記》『新文學史料』2012年第3期(總第136期) 2012.8.22
- 張 梅 從晚清到五四兒童期刊上的圖像敘事『中国現代文學研究叢刊』2012年第8期(總第157期) 2012.8.15
- 陸 胤 【書評】文体敏感、史家分寸在場體驗 讀陳平原《作為學科的文學史》『中国現代文學研究叢刊』2012年第8期(總第157期) 2012.8.15
- 張 弛 梁啓超《新大陸遊記》中的文學描写和文化反思『中国現代文學研究叢刊』2012年第9期(總第158期) 2012.9.15
- 周 曉平 黃遵憲書面語變革實踐的路径、因果与影響『中国現代文學研究叢刊』2012年第9期(總第158期) 2012.9.15
- 董 炳月 《留東外史》的歷史位置『中国現代文學研究叢刊』2012年第11期(總第160期) 2012.11.15
- 陶 春軍 《小説月報》的改版与《小説世界》的創刊『出版史料』2012年第3期(新總第43期) 2012.9.25
- 劉 蘭 商務印書館的期刊群『出版史料』2012年第3期(新總第43期) 2012.9.25
- 『福建工程學院學報』第10卷第5期(總第58期)《林紓研究專刊》2012.10.8
- 伝承林紓文化思想 打造林紓研究重鎮 《林紓研究專刊》代序 吳仁華
- 民国初年林紓政治傾向變遷之考察..... 張俊才
- 林紓小説序跋与中国伝統文化論綱..... 付建舟
- 近三十年林紓形象的演進及文化解讀..... 蘇建新
- 訳林与出版双絶唱 張元濟与林紓..... 盧仁龍
- 林紓“白話道情”考論 胡全章
- 《杭州白話報》上林紓的白話道情..... 郭道平
- 林紓訳思想 林 農
- 跨文化伝播視野下的林紓及其訳活動 羅妍、洪長暉
- 林紓訳思想与“福建精神” 胡萍英
- 論林紓的莎士比亞訳 彭建華
- 從詞彙角度考察林訳《茶花女》 施 彦
- 以《吟邊燕語》為例探究林訳之“訛”... 魏策策
- 從《黑奴籲天録》探析林紓的訳觀..... 余学勇
- 林紓訳愛國思想研究綜述 丁彥藻
- 試論林紓的戲曲創作 鄒自振
- 林紓的題画藝術 龔任界
- 林紓論古文的審美形態 張勝璋
- 論林紓的韓柳文批評 以林紓三部理論著作為中心 劉 城
- 身世原非杜拾遺，淒涼偏讀拾遺詩 試析杜甫對林紓詩歌創作的影響 徐 瑛
- 論林訳《不如歸》与外交偵探小説在晚清的接受 李艷麗
- 『清末小説』第35終刊号 2012.12.1
- へプバーン、マティーア兄弟と美華書館 樽本 照雄
- Bruno Lessing の中国語訳 渡辺 浩司
- 商務印書館『涵芬樓新書分類總目』について 沢本 郁馬
- 民国第一小説 民国第一劇本 郭 長海
- 談《血泪黄花》
- 徐劍膽考論續篇..... 胡 全章
- 陳冷血兩篇翻譯小説的日語底本 ... 張 艳
- 《卢梭魂》作者考辨 宋 庆阳
- 《刘鹗年譜長編》后記 刘 德隆
- 『清末小説(研究)』目錄 第1-35終刊号